

夜明けの宇宙堂

猪野省三



夜明けの宇宙堂

猪野省三



少年少女／創作文学

夜 明 け の 宇 宙 堂

N. D. D. 913 偕成社 210p. 21cm 1970年

発行 昭和45年11月15日

定 価 560円

著 者 © 猪 野 省 三

発行者 今 村 広

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5

T E L (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本乱丁本はおとりかえいたします。

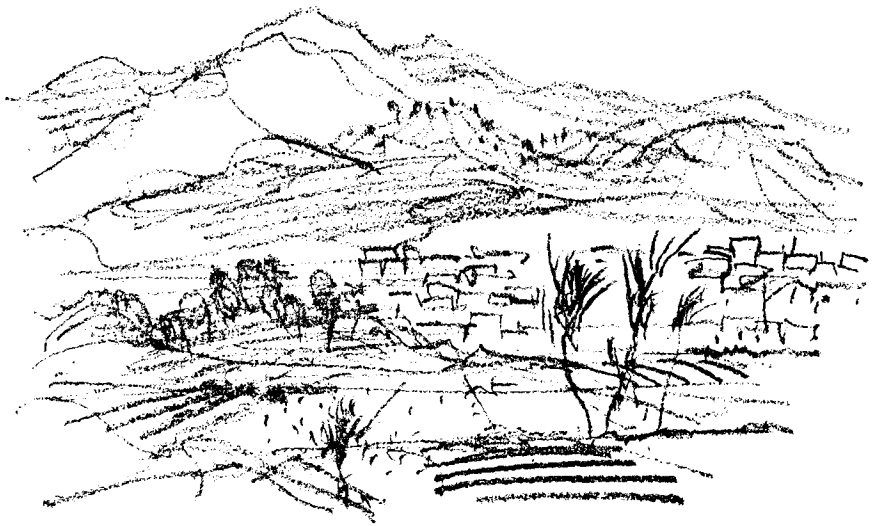
8393-719040-0904

検印省略

・はしがき

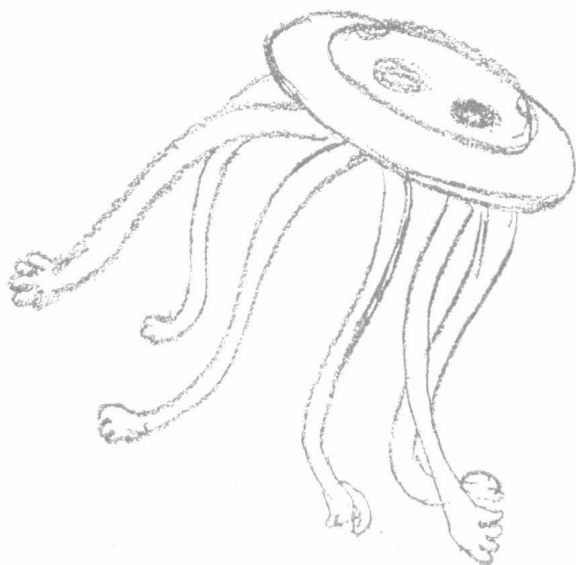
化石原人の探検に活躍した風野町の少年たちは、宇宙堂時計店の主人が、宇宙人と交信している現場を発見した。まもなく、宇宙堂主人は、宇宙人から一億円をもらって、店を近代的に改装して、はなばなしい宣伝をはじめ、町の人をあっとおどろかせた。

少年五人と少女ひとりをくわえた探偵団は、宇宙堂の秘密をさぐろうと行動をおこした。すると、意外な事件がつきつきにおこる。少年少女は、恐怖をだいたんにのりこえ、奇怪な謎をといて、真相をつきとめる。



夜明けの宇宙堂／もくじ

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ロマンチックな探検家様	最後のなぞが残っている	三つの疑いは、とけたが	留置場にいられた宇宙堂	絶対秘密の宇宙旅行	正体不明の十パーセント	疑いふかまる宇宙堂のなぞ	カプセルのなかの宇宙堂主人	とらわれの竜太	宇宙人、風野町にあらわる
135	126	113	94	76	64	50	37	19	6

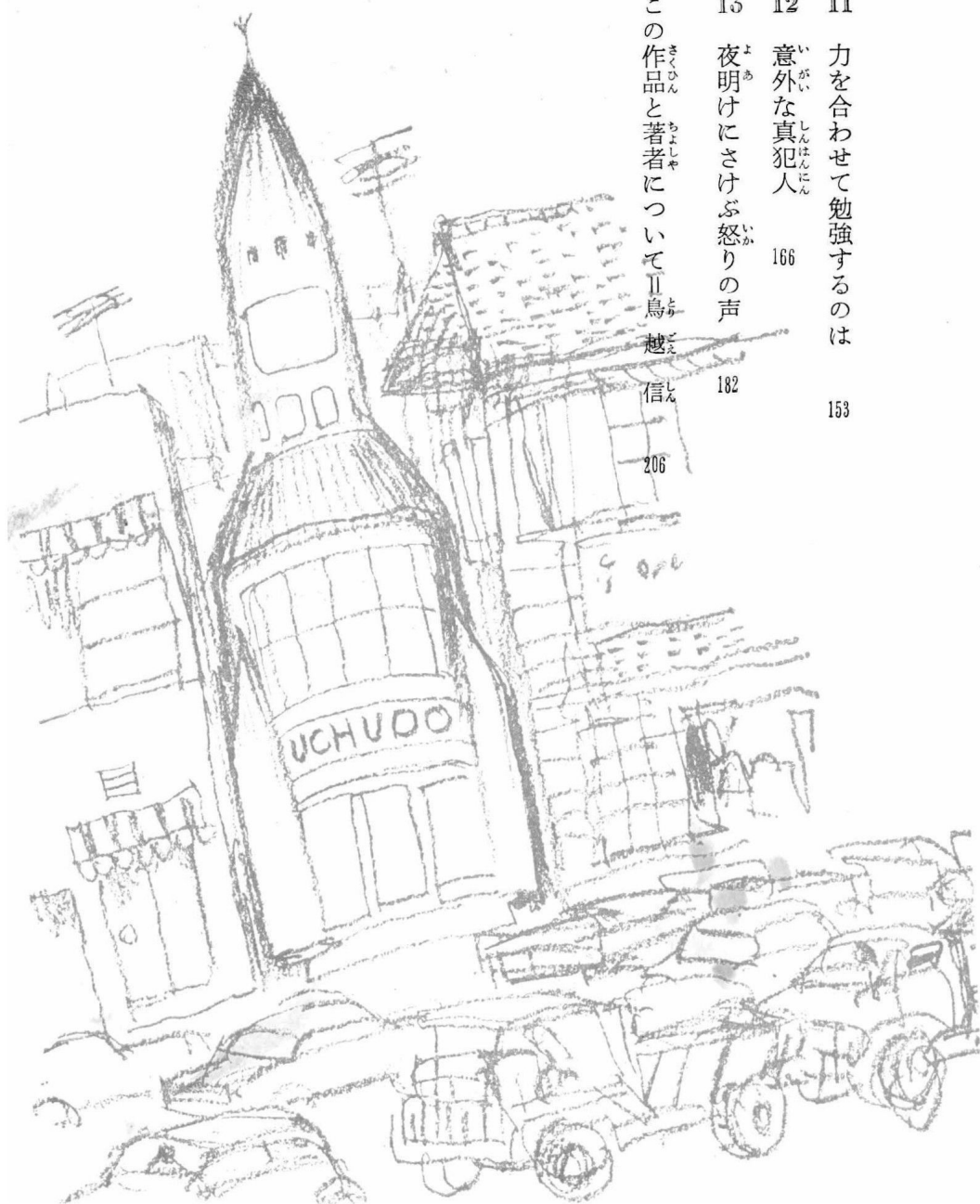


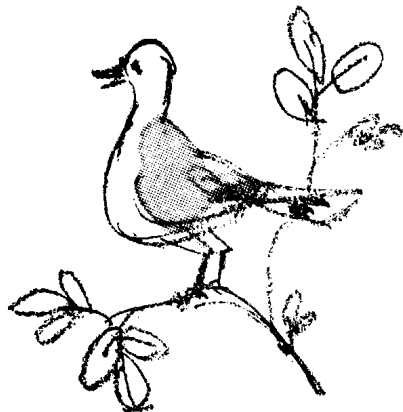
11 力を合わせて勉強するのは 153

12 意外な真犯人 166

13 夜明けにさけぶ怒りの声 182

この作品と著者について 206
鳥越 信比





作者・猪野省三^{いのしょうぞう}

1905年、栃木県鹿沼市に生まれる。小学校教師を経て、藤森成吉、中野重治などとともにプロレタリア文学運動をおこす。戦後、日本児童文学者協会創立に参加。『ジニアのゆめ』『テングの庭』『化石原人の告白』等多数の作品がある。現住所／栃木市片柳町1-24-13

画家・松田 稷^{まつだ のり}

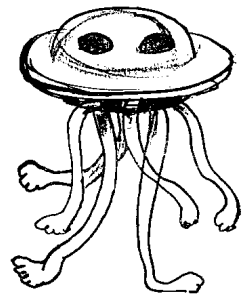
1915年、埼玉県に生まれる。東京工芸学校図案科卒業。1943年岡田三郎助賞、1957年新作家賞を受賞。1950年頃からさし絵を始め現在に至る。新制作協会油絵部会員。『白き処女地』『青春は美し』『海の嘆き』等多数の作品がある。現住所／東京都豊島区雑司ヶ谷2-24

夜明けの宇宙堂

猪野省三



1 宇宙人、風野町にあらわる



一

堀口正彦は、新聞の折りこみ広告を見るのが好きだった。

折りこみ広告は、おおいときには、七枚も八枚も、はいつてくる日があった。町うちの商店ばかりでなく、三十キロもはなれた宇都宮市のデパートや、十キロはなれた栃木市のショッピングセンターまでが、風野町に、宣伝の手をのばしてきたからであった。広告の印刷も、だんだんきれいになってきて、オールカラーの豪華版まであらわれるようになった。

広告のなかで、正彦の心をいちばんひきつけるのは、町のスーパー・マーケットの広告だった。スーパーの広告は、かならず、その日の目玉商品が、大きく印刷してあったからだ。

『魔術のように信じられないお値だん——市価三百五十円のてんぷら油千四百グラム入り一かん二百十五円。』

などと印刷してあるのを見ると、正彦の頭は、ものすごいスピードで、回転をはじめるのだ。

正彦は、こと金銭の計算になると、自分でもびっくりするほど、ふしぎな力をあらわす。へ金銭につよい」というのが、正彦の特技だった。

「へ三百五十円のでんぷら油が二百十五円」という数字を見ると、正彦の頭のなかの計算機が自動的にうごきだし、まぶたの奥のメーターに、カチ、カチ、カチと、つきからつきへと数字があらわれてくるのだ。

「かあちゃん。きょうの目玉商品は、てんぷら油だよ。」

と、お勝手で、朝ごはんの用意をしている母のところへ知らせにいく。それから、正彦は、はや口でしゃべりつづけるのだった。

「ね。かあちゃん。ふつうの店で買えば三百五十円するものを二百十五円で買えば、百三十五円もうかるだろう。もうかった百三十五円で、百円の丸ハムを特売値だんの六十円で買うのさ。すると、三十五円と四十円で七十五円とくするよね。とくをした七十五円で、定価五十円のチョコバーを特価三十五円で買えば十五円またとくするから、とくした十五円ともうけた二十五円をくわえるとちょうど四十円。四十円はまるもうけだよ。その四十円は、おれのおこづかいにいただし、というかんじようになるんだよね。」

母は、頭をかしげながら、

「そんなにたくさん買っても、まだ四十円も現金がのこるのかねえ？　ほんとうに、魔術のようなお値だんだよ。まったく。」

といいながら、四十円のおこづかいをまんまと正彦にせしめられてしまうのだった。

特技の計算のおかげで、ごちそうをたべたり、おやつをいただいたり、そのうえに現金で四十円のおこづかいをせしめるのだ。だから、正彦にとって、目玉商品をさがすのは、なによりも魅力があるのにちがいがなかった。

三月十四日のことであつた。

正彦は、いつもの朝のように、玄関に、新聞をとりについて、折りこみ広告をぬきとってから、本紙だけを父にわたした。

「さて、きょうの目玉商品は、なんだろうな？」

広告のなかから、目玉商品をさがしていると、

「あっ？」

正彦は、思わずいきをのみこんだ。

目玉商品よりも、はるかにショッキングな文字が、目のなかにとびこんできたからだ。一枚の

広告に、

『宇宙人、風野町にあらわる。』

というきみような字体の文字と、円盤のような頭をした宇宙人の写真が、印刷されていたのだ。
正彦は、なんども、つばきをのみこんでから、そのさきに目を走らせた。

『宇宙人が設計した未来のデザイン。』

改築新装の宇宙堂時計店。

輸入時計も貴金属も店いっぱい。

三月十五日、オープン。

当日は特に、当店のために、白鳥座のガンマー・ベーター星から派遣されてきた宇宙人が、
ご来店のお客さまに記念品をさしあげます。握手やサインにも応じます。』

読んでいるうちに、正彦の胸の鼓動がはげしくなってきた、もうじつとしていられなくなった。
朝ごはんをすますとすぐ、正彦は、家をとびだした。

いつもの日なら、七時に、父が、バイクに乗って、羽鶴石灰鋳業所の職場にでかけるのを見お
くる。それから、三十分もすぎてから、ゆっくり家を出る正彦だった。が、

その朝にかぎって、父が、バイクのエンジンをかけるよりもまえに、正彦はもう、学校にむか
って走りだしていたのだった。

前の年の秋のことであつた。

正彦^{まさひこ}たちは、おなじ組のなかまと、風野^{かぜの}町少年探検隊^{たんけんたい}をつくつて、化石^{かせき}原人^{げんじん}をさがすためにいろいろな冒険^{ぼうけん}をしたことがあつた。

少年探検隊^{たんけんたい}のキャップは雪山^{ゆきま}竜太^{りゆうた}、隊員^{たいいん}は、堀口^{ほりぐち}正彦^{まさひこ}、豊田^{とよた}良秀^{よしひで}、田中^{たなか}朝雄^{あさお}、大村^{おおむら}真一^{しんいち}。みんなで五人だつた。

十月のある日曜日のこと、五人の隊員は、化石^{かせき}原人^{げんじん}をさがすために奇岩^{きがん}怪石^{かいせき}の山にのぼつた。そのとき、化石^{かせき}原人^{げんじん}は、影^{かげ}もすがたも見せなかつた。

がっかりして、かえろうとしたとき、少年たちは、異様^{いよう}な男にであつたのだった。

男は、奇岩^{きがん}怪石^{かいせき}のなかのひとつの岩の上に、あぐらをかいていた。黒いジャンパーに黒いズボン、黒い毛糸であんだナイトキャップのようなものをかぶっていた。

そして、男は、胸^{むね}の上に両手を組^くんで、

「ベントラ、ベントラ、……。」

と、空にむかつて、一心^{いっしん}によびかけていたのだった。

(なにをしているのだらう?)



ひとりでたずねるのは、気味わるくてできなかった。で、みんな声をそろえて、

「おじさん！　そこで、なにをしてるの？」

と、大きな声でたずねた。

「しっ！　しずかにしてくれ。わたしは、いま、宇宙人^{うちゅうじん}をよびだしているのだ。あっ！　しまった。

わたしの念力^{ねんりき}が、いま、まさに、宇宙人^{うちゅうじん}の念力をキャッチしようとしたところだったのに……きみたちの雑音^{ざつおん}のために、切れてしまった。」

「宇宙人をよびだすんだって？　ほんとうかなあ。」

「きみたちは知らないのか。U F Oの真理を……U F Oとは、未確認飛行物体——すなわち、空飛ぶ円盤のことだ、……宇宙人が、空飛ぶ円盤に乗って、いまや、世界のいたるところに出現していることを知らないのか……。」

岩の上の男は、しんけんな声でいった。それから、

「あやしいと思ったら、いつでも、ここへ訪ねてくるがよい。」

といって、名刺を一枚、岩の上から、少年たちのほうへひらひらとばした。

名刺には、

未確認飛行物体（U F O）研究会

日本支部正会員

川 津 夢 星

宇宙堂時計店代表取締役
栃木県風野町本町十番四号
電話（〇××）×・〇×××番

と印刷してあった。

宇宙堂なんて時計店のことは、だれもおぼえていなかった。

そのつぎの日の放課後に、みんなで、名刺にかいてあるところへ偵察にいった。

ないと思っていたのに、宇宙堂という時計店がたしかにあった。

宇宙なんて大きな名まえと反対に、小さくて、みすばらしくて、この町の子どもたちさえ気づかないほどの時計屋だった。

なかをのぞいてみると、店のおくの修理台のまえに、主人らしい男がすわっていた。

電気スタンドの光で、てらしだされていた顔は、たしかに、山の上で見た男にちがいはなかった。山の上では、気がつかなかったが、よく見ると、男の顔は、エジプトかアラビアの人のような顔色と人相をしていた。日本人は、みな世界のどこかの国の人の顔ににているものだ——といわれているほどだから、いなかの時計屋が、アラビア人になににいても、それほどふしぎなことではなかった。

けれど、この店の主人が、宇宙人をよびだせる術を知っているということは、少年たちにとって、いかにも、ふしぎなことであり、「あやしい」と、にらまずにはいられないことだった。

(こんどは、宇宙堂と宇宙人の探検をやるんだ。)

と、みんなの心がひらめいた。

探検隊の少年たちは、未知の世界の新たな探検に、心をおどらせていたところだったのだ。

そういうときに、

『宇宙人、風野町にあらわる。』

という宇宙堂の広告が、新聞に折りこまれて、町じゅうに配達されたのだ。

この広告を見たときの正彦が、

(待ちに待っていた日が、ついにきたぞ。すぐ、探検隊の行動開始だ！)

と、興奮こうふんして、家をとびだしたのも、当然とうぜんすぎるほど、当然のことであつたといわなければなら
ない。

三

風野かぜの小学校は、夕日おひが丘の上になつてゐた。むかし、夕日の長者ちやうじやという豪族ごうぞくがすんでいた屋敷やしきのあとだといふので、夕日が丘とよんでいるのだそである。

学校の丘にのぼる坂の右側は、小高い石こだかがきになつてゐた。石がきの石には、青白いコケがこ
びりついていて、その上に、ツタやクズをつるが、人体模型じんたいもけいの血管けつかんのように、からみついていた。
石がきは、坂の下で直角ちよくかくにまがつてゐる。まがつた石がきの奥おくは、どこから見えない密室みつしつの
ようになつてゐた。そこには、いつもしめっぽい空気がよどんでいて、いかにも、秘密ひみつの場所ばしょく
さいにおいがただよつてゐた。

ここが、風野町かぜのまち少年探検隊たんけんたいの秘密ひみつの集合場所しやうごうばしょになつてゐた。

家をとびだしてきた正彦まさひこは、まわりを注意しながら、石がきのかげに身をひそめた。すると、

「正彦！」

だしぬけに、良秀よしひでが、奥おくのほうから、とびついてきた。

「良秀！ おまえもか……。」